

「狼疾」の使命：勝又浩の批評精神

Yamauchi, You / 山内, 洋

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要 / 日本文学誌要

(巻 / Volume)

79

(開始ページ / Start Page)

50

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2009-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010184>

「狼疾」の使命

— 勝又浩の批評精神

私の書くものが「狭く」その上「雑然」としていているとは、かつて人に言われて、そういうことかと頷いたことだが、今もそれを思い出さざるを得なかった。雑然の方は、改められるものなら改めたいと思うが、おそらくは既に身についた病であるだろう。狭さは、これはもうはやくから諦めている。ただ少しばかり言い訳を許してもらえば、私はむしろ狭さを持った人、自分の狭さをじっくりと噛みしめているような人が好きである。その意味で、作家論としては不備ながら、中島敦の「狼疾」を論じた「我を求めて」から始まるこの一冊の中にも、私の好むところ、その出発するところも赴かんとするところも結局よく表れているのではないかと思う。

山内 洋

はじめの著書となった『作家論集・我を求めて』のあとがきに、かつてこの批評家はあえてこんな言葉を置いた。当の表題作によって群像新人文学賞を受賞してから四年後、一九七八年のことである。ちなみに氏の批評に「狭さ」や「雑然」を見た「ある人」とは、受賞時に同作をいちはやくその「文芸時評」に取り上げた江藤淳にほかならない。江藤はここで「我を求めて」に中島敦の文学「スタイル」に関する言及がないこと、それゆえ勝又の中島論じたいにもまた「それ」が欠けていると指摘している。今見ればそれらの指摘にはそれなりの理由もあったことがわかるものの、同時に江藤淳という先行者、その批評「資質」及び「スタイル」には、この中島敦論が抱えている最も大切なモチーフも、吉本、江藤以降に出发した批評家たちの「私」が向き合わなければならなかった困難の核心もいまだ見えなかったという逆説がむしろあらためて証されるのである。

ともあれ、いまここで大事なのはむしろ江藤淳その人ではない。わたしの願いは勝又浩という批評家が、その出発にあたって為した静かな決意の内実に少しでも近づいていくことであり、とりわけ氏が嘔みしめ耐えていたある「狭さ」の内訳を示すことにある。すると、そこには氏の資質と方法が明らかになるばかりか、驚くべきことに、今まで何度も語られてきた「文学」というものの危機の意味も、そしてそれをそのつど克服し得る「文学」の初志もまた、必ずいくばくか映るはずなのである。

二

先生。早速ぶしつけでございますが、一つお伺ひいたします。一体「我」とは何でございませうか？

「中島敦と私小説」という副題^(註)のつけられた「我を求めて」を、勝又浩は『悟浄出世』のこんな言葉を引くことからはじめた。注目すべきなのは、中島敦を論じながら、その代表作たる『季陵』も『名人伝』も、ましてや最も人口に膾炙した『山月記』さえもが、どちらかといえはあえて「脇役」に追いやられていて、その読解の中心に据えられることは周到に避けられていることだ。

言いかえれば、その最初の一行を書き出す前から勝又の胸のうちには、己が囚われた、己が描くべき中島の像が強くあった、ということである。勝又にとつて充実して論ずべきは、あくまでもまず、このとりかえのきかない「我」につかまれ「我」を

患い、「我」を超えるものに届かんとして、もがき苦しむ精神の働き、すなわち「狼疾」それじたいであって、その「昇華」の仕方や「出口」のあり方を性急に示すことにはなかったのだ。批評家によって代わり選ばれ、まず呼び出された作品は、第一にこの『悟浄出世』であり、他にはたとえば初期の習作「北力行」や『過去帳』二編（『狼疾記』『かめれおん日記』）、そして『和歌でない歌』なのであった。それらの選択の底には中島敦の「自己懷疑」「世界懷疑」のあり方、そのエッセンスをなるべく雑物の少ないところから抽出し、提示したいとの戦略がおそらくあったのだろう。ただ、勝又は悟浄の「懷疑」に対して、次のように言う（勝又流に表現すれば「ケチをつける」「揚げ足を取る」ということになるのだが）ことを忘れない。

もちろん、「自己」、及び世界の究極の意味」などという大それた疑問を、人は四六時中懐きつつ生活しているわけではないから、そんな疑問をとどころかまわず振りまいて歩くのは、むしろ滑稽ですらあるに違いない。だから中島敦も、それをいわば諸機能のうちのある部分ばかりが肥大したかたわ者、つまり一人の「妖怪」のおもしろい物語として描いたのに違いないのである。

しなやかな平衡感覚を保持した生活者たりえず、こうした青臭い「大それた疑問」につかまれたままで日々を暮らしていることこそが『西遊記』の中でいっけん最も人間らしく見える「悟浄」がむしろ「妖怪」そのものたるゆえんだ、とはそれまで誰

も言わなかった卓抜な読みである。こうした「読み」の魅力、「人間学」こそが、その出発時から勝又批評の醍醐味であることはまず言っておかなければならないであろう。そして、こうしたアントロポロジーをいつ、どうして勝又がその身に纏うことになったかもおのずと興味を引かれるところだが、今ここでは、とりあえず次のことだけを言っておきたい。

じつは「我を求めて」の主たるモチーフは、その原型が『和歌でない歌』をその入り口にして中島の「狼疾」を論じた一九六九年発表の「戯れ歌の心」の中にすでに充実してある。

ある時はヘーゲルが如万有をわが体系に続べんとせし
ある時はアミエルが如つ、ましく息をひそめて生きんと
思ひし

ある時はゲーテ仰ぎて吐息しぬ亭々としてあまりに高し
ある時は淵明の如疑はずかの天命を信ぜんとせし

ざっとこんな具合に古今東西の賢人たちの名を次々とあらわし、そこにことよせておのれの選ぶべき生のかたちを問いつけたのが中島敦だ。その数々の知見への「遍歴」、「教養」への偏執に、一人の人間があたり前に生きていくには、むしろ異様ともいべき情熱を見た勝又浩は、中島敦自身がそうした自己の「奇怪さ」に深く気づいていたのだと言う。そして末尾の句「いづくにか行くわが魂ぞはやも三十に近しいふを」の中に「教養」がその「生活の現実」に次第に深く復讐されずにはおかない自意識のあり方、作家の姿を見たのだ。おりしもこの時、勝

又もまた齡三十を迎えている。以降こうしたものの見方は、対中島敦のみならず、勝又が「知識人」の文学を吟味、あるいは批判するときの基本的構えとなったのである。「戯れ歌の心」の文体は、「学術的」というよりはすでに十分に「批評的」なそれではあるが、しかし批評家自身もまた、おのが身を中島に重ね合わせながら、自分の資質をより活かすべき道のありかを懸命に探していたことが文章から伝わってくる。ここから傑作論文「『李陵』の構図」までに約二年、さらに「我を求めて」にたどり着くまでには中島敦の逝去した年齢をいくばくか越えるまでの歳月を必要としたことも併せて記しておきたい。

ともあれ、問いをより本筋に戻そう。さて、このように様々な知の意匠を「わが体系に続べ」ようと苦闘した中島敦の「私」に勝又浩は何を見ていたのか。それを共に見ようとするのが「遂に決定的なスタイルを産み出し得ずなくなった作家」（三浦朱門）を論じながら、まさにその「決定的なスタイルの不在」の意味と因子に迫ろうとした勝又の方法を知ることなのである。

俺は正直なのだらうか。それとも不正直なのだらうか。

俺にはよく分からね。一体俺は人と談話するのに真面目になつて正面から相手になることは殆どない。親しい人でも、さほど親しくない人でも、いつも、その相手の境遇、地位、教養の程度を考へて、口先だけで調子を合せて行くに過ぎない。（中略）口は下手な方なのだが、たゞ、人と口をきくことに興味も情熱もなく、お義理で、お茶を濁してゐるだけだ。（中略）内心彼らを軽蔑しながら口先だけ調子を

「狼疾」の使命

あはせて恭しい態度を粧つて行く。(中略) ある人の前では極端な物質主義者になり、他の人の前ではひどく理想主義を謳歌する。相手に従つて、あるひは其男と同意見になり、或るひは、逆の効果を狙う事ができる場合には、其人と反対の意見を唱える。が、何れにしても俺自身の本音ではない。これは、他人といふものに対する軽蔑から来てるのか、意見の交換といふことに対する不信から来たものか、それは俺にも分らぬ。(中略) 人と話をするのに定見のないのはいいが、談話に於てばかりでなく、どうやら、自分自身にも一つのものに対する定見がもてなくなつてきたやうだ。(『北方行』)

『北方行』の主人公折毛伝吉の自意識ばかりが肥大した、しかしかにも青年らしい独白だ。勝又ならずとも、ここに現代にもまったく相通するようなコミュニケーションの不全症候を、そしてそこに必然的に意識されるアイデンティティ不安を見ることができるだろう。むろん自らの文学的資質のありかをいまだ探りあぐねている作家自身の不安もまた色濃く影を落としていることは言うまでもない。『北方行』という小説は、その構えとしては民族や国家の意味、あるいは文明の衝突の意味を問う「ロマン」が目指されているものの、そうした企図は、中島敦とその等身大的主人公たちの、誰を選んでも相似形なことうした「自己懐疑」によってその骨格形成を裏切られ、破綻していたのだ。

次のように勝又は言う。

が、彼が「関心」したその「自己」とは、実はなんとも取り出しようのない、実体的ない「自分」でしかなかったのである。(略)ところが、その自我がないという自己に、これほどこだわり続けた作家も、実は他に類がないのではなからうか。自我不在ということを強烈に意識する自我、それがこの作家の「一貫した一つのテーマ」に他ならなかったのである。

「自我なき自我意識の文学」。これこそが、勝又浩が中島敦の文学から採り出した、いちばん最初の結論と言えるかもしれない。勝又は同時に、ここで芥川の死以後の事情を、特に昭和十年代の「暗い谷間」にあつて作家たちが自我の崩壊を余儀なくされた内実について丁寧に語っている。だが、わたしには勝又が語り残しているもうひとつの時代状況の方もまた気になるのである。すなわち、このとき批評家の眼に、当然同時代の文学的状况が迎えている新しい困難が二重写しになつて捉えられていなかったはずはない、ということだ。

先述した「戯れ歌の心」から「我を求めて」の間の時間、そこにはたとえば三島の死があり、また古井由吉のような作家が「自我」というものを個においてだけでなく、個のまわりに影のようにひろがつて、たえず群れに横切られる部分まで含めて、捉えなおして「みるべく」『先導獣の話』や『香子』のような実験的な作品で出発を遂げた時期にもあたつてゐる。実験的な主体」を疑い、「他者」に照らされてこそむしろそこに浮かびあ

がつてくる個性、「私」を考察し直すことからもう一度出発することを宣言した作家たちのことが勝又の念頭になかったはずはないのだ。

こうした作家たち登場の状況をまさに「昭和十年代」の様相になぞらえ、それを「脱政治」「脱イデオロギー」による「内面」への傾斜として、より危惧をこめて語ったのは、たとえば勝又の師である小田切秀雄その人にほかならない。しかし勝又浩という、「戦後」に遅れてやってきた新しい批評家には、世代的にも、またその文学的資質としても「内向の世代」の問題意識をこのように不可避免的に共有しなければならぬところがあつたのである。そんな勝又にとつて、生涯を誇りある「社会主義者」として送り、また常に「状況に抗する人」でもあつた小田切秀雄をいつもごく身近に感じ敬愛していたこと、そして大学紛争ただなかの一九七〇年前後の季節を文学部の助手として過ごしたことは、おそらくその胸中や立場を当時、微妙に複雑なものにした場面も間々あつたに違いない。だが、いまこれ以上小田切と勝又の「資質」や「世代」を対立項として扱うことは、問題をむしろ単純にしすぎてしまふだろう。

小田切没後にその弟子たちやゆかりある人々によつてまとめられた『小田切秀雄研究』の中における勝又の理解は、既に^註ある深まりを見せた後のものだ。

曰く、考えてみれば小田切もまた、かつて国民が皆酔つていなければならなかつたときに独り目覚めていなければならぬことの困難と重要さを守ろうとした人だつたのだ、と。彼の批評的キーワード「近代的我自我」も「知識人の責務」もそうした

文脈で理解しなければほんとうにはわからないのだ、と。そして小田切の「たたかうことはそのせめぎあいや勝敗を通して自分を敵をも確実な姿において照らし出すことを可能にする」という言葉を「小田切秀雄の書いた文章のなかで最も美しいものの一つ」だと言う。だが、次のようにもつけ加えることを忘れなかつたこと、そこにやはり「勝又浩」はいると感じさせる。

「自我と個人的状況のなかにだけ」閉じ籠る、小田切秀雄の言う須磨の光源氏のような在り方を彼は許容できないのだ。だが、人はときに徹底して己の内部に閉じこもり、向き合うことによつて、時代の悪しき陶酔に背を向けるといふ生き方もあるし、そのことによつて逆に、世界をのみ込むという精神の運動もある。

考えてみれば中島敦にしても古井由吉にしても、べつにその「内面」がたとえば「社会派」と呼ばれる作家たちより「豊穡」であることによつて「内向」したわけではない。言ってみれば彼らはむしろ「他者」や「外部」と向き合う際に「自己」なるものの貧しさ、あるいは「うつろいややすさ」に、より敏感な表現者であつただけである。しかしだからこそ彼らは、その時代を覆う仮そめの「イデオロギー」やこの世の「現実」とやうに對してもまた、深く懷疑し、拒否しなければならぬ精神だ。

「昭和十年代」とは、「昭和初年代」に得た思想の輝きが次第に圧殺されていくがゆえに、ともすれば「左翼思想」か「風俗」にたてこもることで、それぞれの「物語」を紡ぐしかなかつた

時期にあたる。中島敦という作家には、そうしたできあいの「物語」に依拠して性急に「私」を構築することはできなかった。言い換えれば、彼自身の資質の「狭さ」を凝視する眼、「狼疾」がそれを許さなかったのである。彼に為しうることは、ただ「告白に耐えない自己を告白する」工夫を重ねていくことだけであつた。それはいわば「私」をめぐる「方法的懷疑」の作業に不断に挑み続けることを意味する。

勝又浩という批評精神は、それが中島敦という作家の不幸に見えて、かえって僥倖となつたこと、そうした「狼疾」こそがむしろ作家の「私」をして鍛錬せしめ、同時代の他のそれよりも、より本質的、本格的な「文学」のありかを再探索させたことを見抜いた。そして、その努力の歩みがある「山月記」や「光と風と夢」を経て『李陵』に至る道であつたことを諒解した。さらに言えば、結果的に絶縁寸前の「日本近代文学」の導線をもう一度つなぎ直すような偉大な嘗為となつたことを納得していったのである。

ここにいたつて勝又浩は静かに、だが決然と自らの「文学的立場」を「告白」、明瞭にする。

文学は、むろん風俗でもなければ思想でもない、現実でもなければ観念でもないのである。それは、言ってみれば、無限に観念たろうとする現実なのであり、現実たろうとする観念なのである。そして、その両極を意識し、計量し、埋めて行くこうとする、人間の生存感覚なのである。だから人は、作家が風俗を描くとき、その向うに見える思想を観

じ、作家が観念を描くとき、その裏に透けてくる現実を思う。だからこそ、私小説は一向に減じもせず、その論議はいつまでも繰り返されるのではないか。なぜならば、私小説とは、観念でも現実でもないその現存在を、思想でも風俗でもない、しかしまた確実にその交点であるところから、一挙にきりこもうとする、その運動だからである。

それは「私小説」そのものに対する擁護というよりは、いわば「私小説的精神」の擁護者たらんとする最初の力強い宣言であつたと言えよう。それこそが結局は「文学」と呼ばれているものの根幹をその底で支えているもの、基本の精神運動であるという確信が、勝又のなかでこれより動じることはないのである。「私小説制作の意図がどういふ風にして客観小説制作の意図と触れ合ふか」と言う小林秀雄の「私小説」論議（註五）に響いていたモチーフは、こうして「我を求めて」に受け継がれることになつたのだ。

勝又浩は、「無限に観念たろうとする現実、現実たろうとする観念の両極を意識し、計量し、埋めて行くこうとする、人間の生存感覚」こそを「文学」の本質として採出した。そして、それはとりもなおさず、この批評家もまた中島敦という精神を手がかりにした「方法的懷疑」の試み、「我を求めて」を通して「疑い得ぬもの」を自他のうちに見出した、ということを意味する。それらは、いずれにしてもまずとりかえのきかない「この私」の「狭さ」に耐えること、その肉眼に映じた「自己」と「世界」を懷疑的（＝批評的）に語ることから出発しようとする

る態度によつてもたらされるよりほかはないのだ。「私小説的精神」とは言うなればすなわち、かくまでに「現象学Ⅱ実存論」的態度なのである。

三

だとすれば、こゝらで「批評とは竟に己の夢を懷疑的に語ることはないのか」と語つたあの小林秀雄を、とりわけ勝又浩にとつての「小林秀雄」に触れないわけにはいかない。「中島敦と私小説」という「我を求めて」の副題は、勝又のその後の批評的道のりや射程とするところを見事に言い当てているが、彼はその道の過程をまさに小林秀雄が確立した「近代批評」の恩寵と限界とを同時に味わい感じながら歩いてきたのにちがいないからだ。

その逝去という事実に応答するように相次いで書かれた二つの小林秀雄論は、勝又が自身の新しい「私小説」論を展開するための重要な準備、転機となつた仕事である。勝又はこれらの論で、小林の『私小説論』が抱えている「ねじれ」の意味に迫り、解きほぐそうとした。そうした作業の性質上、また勝又自身の小林秀雄と「近代批評」への信頼のかたちも相俟つて、二つの論文に共通に流れる問いを簡明に見ることはなかなか難しい。だが、要するに勝又はここで「社会化した私」という小林秀雄のマジックワード、その幻惑の謎にはじめてといつてよいほどに肉迫したのである。

すなわち、こういうことだ。

小林秀雄もまた、志賀直哉のような「自我」を持たない「自意識」から自分の文学をはじめた一人であり、彼の『私小説論』とは、つまりは志賀直哉になり得ぬ時代の文学はどうあるべきかという問いをその内側に抱えている。その超克として、あるいは処方箋として打ち出されたのが「社会化した私」という概念だった。これは作家の自己没却、いわゆる「無私の精神」を言つたものだが、そこには芸術作品制作上の心得を越えて「人間的無私の精神」までを同時に強く要求してしまうところがある。ここには実はむしろ小林秀雄が揚棄したはずの志賀直哉的な人格主義文学観、倫理主義的な「尻尾」があるのだ。小林の言う「社会化した私」とはいつけん誰にも「西洋的」「近代的」な概念に見えるがドラマされてはならない。それは、いわば第一期の「私小説」をつくりあげたと同じ、きわめて「日本的」「求道的」精神によつて、「私小説」を論じたものであり、そのあたりに『私小説論』の複雑さ、良さも厄介さもあるのだ、と。

こうした認識を核にして、勝又の新しい「私小説」論展開はさらに深まりを見せていく。一九九〇年、「私小説論ノート」^{〔七七〕}では第一期「私小説」は志賀直哉と小林多喜二という「奇蹟的な自我」の完成、もしくは虐殺によつて終つたこと、しかし、そこから新たに「第二期の私小説」の問題、すなわち、「もはや志賀直哉や小林多喜二にはなれない」人々の「私」、及び「私小説」の格闘が始まつたのだと告げる。こうした理解がこれまで見たような中島敦読解の仕事と深く響き合うものであることは言うまでもない。

ここで勝又浩は、藤枝静男から、大庭みな子までを引きなが

ら「日本の社会化された私」について論じる必要とその可能性に向けて、大きくその一步を踏み出しはじめたのである。「私小説」が「自我が常に他者と対峙するような西欧近代小説」から見れば、すなわち常に「世界モデル」を構築しようとする「本格小説」から見れば「ムダ話」のように見えるのも無理はない。

「私小説」は「いつも何かをつくらんと見せては壊し、壊したかと思えては雲に隠れてちゃんがあるという、まるで絵巻物のように横すべりした展開ばかり」だからだ。しかし、「自我などは関係性の中でたえず揺らぎ変容するのだと皆が体感しているような伝統の文学」の「究竟」はやはり「構築」にはなく、むしろ「空無」にこそあるのではないかと。

思えば「反動的」とのありうべき批判をも覚悟した、まさに果敢な一步であったと言える。またこの論ではじめて「私小説」を成り立たしめる「日本語表現」の問題にも言及していることも付記しておきたい。

そして今もなお勝又浩の「新しい私小説論」検討は精力的に続いている。その頼もしい協力者、継承者が梅澤亜由美氏ら「法政大学大学院私小説研究会」のメンバーであることは言うまでもない。二〇〇〇年からは研究誌「私小説研究」という活動の舞台も整い、いまやその発行も十号を数えるまでになった。「研究会」の大きな達成の一つが「アジア文化との比較に見る日本の「私小説」——アジア諸言語、英語との翻訳比較を契機に」である。そこに収められた「アジアのなかの私小説」で勝又は、中国や韓国で今まさに産声をあげている「私小説」たちにも具体的に

目を配りながら、「近代市民社会成熟」の過程で「私小説」と「私小説」の精神とが必要とされて行く意味について、「それ」が書かれる「必然」について、より広く新しい視野を獲得しながら語ることができたのである。

四

勝又浩のこれまでの「遍歴」、その重層的な仕事に流れているものの「本流」だけをなるべく簡潔に呼び当ててみたい、そう願いながら、わたしはまだ多くのことを語り残していることに気づいている。しかしなお新しい展開を見せ続けてくれる氏を信じて、今はもうおとなしく引き下がろう。

ただ最後に、言わずもがなのことをあえてひとこと言えば、勝又浩の批評精神、その批評的「私」の形成過程には今まで見たような多くのもうひとつの精神との出会いがあったことをあらためて思う。中島敦や小林秀雄をはじめ多くの作家、批評家、編集者たち。小田切秀雄、久保田正文をはじめとする「先生」たち、友人たち。「私小説研究会」のメンバーをはじめとする「弟子」たち。あるいは勝又が長きにわたってその評者としての任を負い続けている同人雑誌の書き手たち。そして今やアジアにも世界にも広がる「私小説」の書き手とその理解者たち。勝又の批評的「私」はその「狭さ」に耐えることから出発し、むしろそれゆえにこうしたもうひとつの「私」、「精神」の深奥に出会う言葉で読み、味わうことができていたのである。「書くものの責任」。韓国の「私小説」の言葉を引きながら近

年の勝又はそう口にするようになった。ひとつの精神がかたちづくられるまでには、「無名性」のそれを含めて、こうした多くの出会いが必要不可欠であること。それこそが、たとえば『引用する精神』の大切な主題であったことをわたしたちは思い出す。また、そこに小田切秀雄のあの「知識人の責務」という呼び声も、また遠く重なり、聴こえてくる。

たとえば作家も批評家も、何の理由によってか「文学」と呼ばれるもののかつて読み、そこに引きつけられ、「文学に似たもの」を書くことからはじめた。そしてその資質や能力の及ぶ範囲でありうべき「文学」を探して、「文学そのもの」へと近づいて行こうと努力を重ねて行く。しかしそうしたたむむことのない努力の継承だけが「文学」という概念を同時に、しかも唯一支えているものだということ。

「芭蕉はひとりで芭蕉になったのではない。」

勝又がたとえばそんな言葉を愛するのも、同人雑誌批評を大切にしているのも、きつとそのあたりに理由があるに違いないのだ。そこには若き日の勝又浩が『季陵』に見たような、いくつもの精神のダイナミクスが、もうひとつの「世界構図」への夢が、今はより成熟した実感をもって願われている、そう言ったとしても、はたしてそれが言い過ぎになるであろうか。

註一 「毎日新聞」「文芸時評」一九七四年五月二四日付。

註二 発表時副題は、「中島敦による私小説論の試み」。

註三 「日本文学」一九六九年五月。

註四 「たたかう教養―追想・小田切秀雄」(『小田切秀雄研究』二〇〇一年一〇月所収)

『二人の先生 小田切秀雄・久保田正文』にも再録。

註五 この「私小説」論とは、いわゆる『私小説論』ではなく、『私小説について』(一九三四年)。

註六 「小林秀雄―自意識の方法」(『群像』一九八三年五月)及び「小林秀雄『私小説論』の問題」(『昭和文学研究』第八集)後に「自意識の行方―小林秀雄」と改題されて『求道と風狂』所収。

註七 もともとは一九九〇年五月、日本近代文学会春季大会のシンポジウムでの基調報告を『日本近代文学』第四三集、一九九〇年一〇月に発表。

註八 『私小説研究』第九号、二〇〇八年四月にも掲載。

(やまうち よう・通信教育部講師)